

NIMBY 問題において説明会の雰囲気住民の議論参加意欲に与える影響

東北大学 非会員 ○奥山 智天
東北大学 正会員 青木 俊明

1. 背景と目的

ゴミ処理場などに代表される NIMBY (Not In My Back Yard)施設は、社会的必要性の高さゆえ、必要性は認められやすい。しかし、自地域への立地を巡っては住民が強く反対し、地域紛争が生じることが少なくない。このような地域紛争には「社会的コンフリクト」と「社会的ジレンマ」が内在する(青木, 2016)。

社会的コンフリクトとは、施設から利益を得る受益者と不利益を被る受苦者が異なるために生じる、両者の対立を指す。一方、社会的ジレンマは、受益者と受苦者が協力か非協力を選ぶ状態を指す。NIMBY 問題では、受苦者は建設に賛成（協力）するより、反対（非協力）した方が、私的利益が高くなる。受益者も、受苦者への補償を行う（協力）より、行わない（非協力）方が、私的利益が高くなる。両者が非協力を選択するため、合意形成は困難になる。

NIMBY 施設の合意形成問題の解決にむけては、手続き的公正が重要になる。例えば、Wolsink (2000)は、自発的な議論参加によって促される“公正に基づく住民と行政の信頼関係の重要性”を指摘している。

信頼関係の構築には、十分な議論と説明の場が必要である。しかし、実際の住民協議では、一部の参加者による罵詈雑言のために「冷静な議論」が難しくなる。議論参加の動機づけは複数考えられるが、このような「説明会の雰囲気」が協議への参加意欲に与える影響を検討した研究は行われていない。そこで、本研究では、①説明会における怒号（雰囲気）が出席者の参加意欲に与える影響と、②その影響過程を明らかにすることを目的とする。

2. 仮説

予測される参加意欲の形成過程を図 1 に示す（グレーの変数は操作変数）。まず、「リスク感」は「関心度」を媒介して参加意欲を高めると予測した(H1a, H1b)。また、「私的損失感」「社会的損失感」は、施設建設による利益が低いため、参加意欲を低下させ

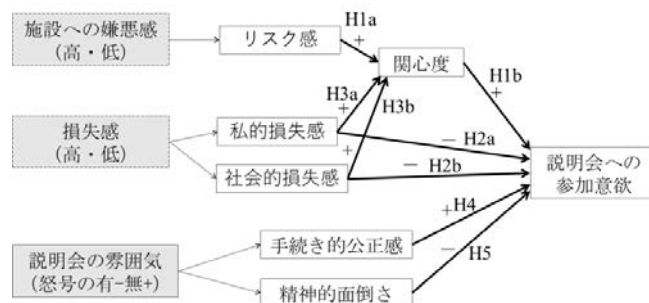


図 1 参加意欲形成の予測図

るが(H2a, H2b)、「関心度」を媒介して参加意欲を高めると予測した(H3a, H3b, H1b)。さらに、「手続き的公正感」は参加意欲を高め(H4)、「精神的面倒さ」は参加意欲を低下させると予測した(H5)。

3. 方法

実験デザイン 本研究では、先行研究 (Wolsink & Devilee, 2009; Guo & Li, 2020 など)ですでに報告されている「施設への嫌悪感」と「損失感」に加え、「説明会の雰囲気」が議論への参加意欲に与える影響を検討した。したがって、『施設への嫌悪感（高・低）』×『損失感（高・低）』×『説明会の雰囲気（良・悪）』の2×2×2の要因配置実験をWEB上で実施した。

参加者 WEB調査会社を通して、一般社会人240名（30名×8条件）が参加した。

手続き 実験参加者は、高レベル放射性廃棄物処分場（高嫌悪感条件）、またはゴミ焼却施設（低嫌悪感条件）が建設されるかもしれない状況の説明を受ける。その際、施設の建設地は実験参加者の暮らす地域（低損失感条件）、または実験参加者の隣町（高損失感条件）とする。実験参加者の暮らす地域に施設が建設される際に低損失感になる理由は、建設地域にはインフラや補助金が供与されるので、周辺地域に比べて損失感が低下すると推察されるためである。その後、実験参加者は、このNIMBY施設の建設を巡っての冷静な議論場面（雰囲気良条件）、または怒号が飛び交う議論場面（雰囲気悪条件）の1分程度の音声と静止画を視聴し、質問紙に回答する。

キーワード NIMBY 施設、雰囲気、住民協議会、参加意欲、損失感

連絡先 東北大学文学部 奥山智天 E-mail: tomotaka.okuyama.t7@dc.tohoku.ac.jp

表 1 参加意欲を高める変数

	β	t	p
C_損失感	.539	3.632	.000
C_雰囲気の良い	.910	4.919	.000
C_雰囲気の良い×損失感	-.131	-3.142	.002
C_関心度	.314	5.255	.000
R^2	0.306		

表 2 損失感が参加意欲に与える影響

	雰囲気	傾き	t	p
雰囲気_悪	-1.3369	.4588	5.4528	.0000
雰囲気_平均	.0000	.2556	3.4288	.0007
雰囲気_良	1.3369	.0525	0.5102	.6104

4. 結果

操作チェック 『説明会の雰囲気（良・悪）』『施設への嫌悪感（高・低）』『損失感（高・低）』を独立変数、「雰囲気の良い」「施設への嫌悪感」「損失感」をそれぞれの従属変数として、一元配置分散分析を行った。その結果、『説明会の雰囲気』の操作は機能していたが ($F(1,238) = 42.00, p < .001$)、『施設への嫌悪感』と『損失感』の操作は機能していなかった（嫌悪感 $F(1,238) = 1.21, n.s.$; 損失感 $F(1,238) = 0.17, n.s.$ ）。

雰囲気と損失感の交互作用 重回帰分析の結果、「雰囲気の良い」「損失感」「雰囲気の良い×損失感」「関心度」が有意に「参加意欲」を高めることが明らかになった（表 1）。すなわち、「参加意欲」に対する「雰囲気の良い」と「損失感」の交互作用が示唆された。また、「関心度」も参加意欲を高めることが示唆された。なお、表 1 の“C_”は独立変数を中心化して用いたことを示す。

雰囲気と損失感の交互作用の詳細 雰囲気と損失感の交互作用をより詳細に検討するため、「参加意欲」を従属変数、「損失感」を独立変数、「雰囲気の良い」を調整変数として単純傾斜分析を行った。その結果、雰囲気が平均または悪い場合（「雰囲気の良い」= M-1SD または M）、「損失感」は「参加意欲」を有意に高めることが分かった（表 2）。一方、雰囲気が良い場合（「雰囲気の良い」= M+1SD）、「損失感」は「参加意欲」に影響を与えないことが明らかになった。

参加意欲形成の全体像 最後に、参加意欲形成の全体像を明らかにするため、共分散構造分析を行った。その結果、雰囲気の良いし悪しで異なる参加意欲形成の構造図が示唆された（雰囲気良：図 2、雰囲気悪：図 3）。なお、この構造図のモデル適合は、 $X^2 = 93.83$,

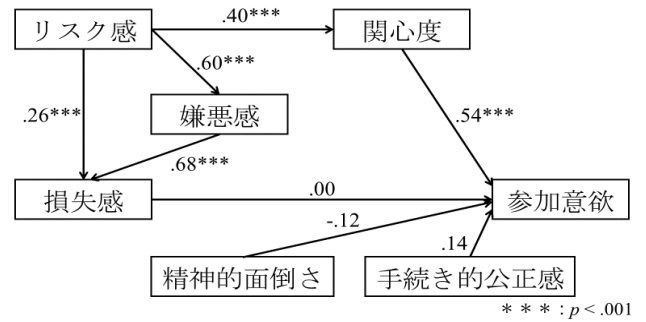


図 2 構造図_雰囲気良

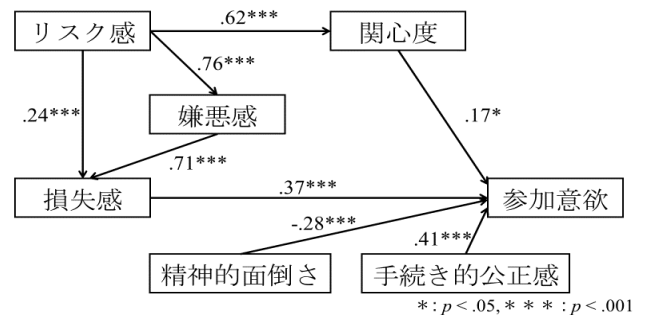


図 3 構造図_雰囲気悪

$p < .001$, $GFI = .909$, $CFI = .910$, $RMSEA = .105$ であり、良好な適合度を得た。

5. 考察

本研究では次の二点が明らかとなった。第一に、雰囲気が悪い場合は良い場合に比べて参加意欲が有意に低下した。多くの住民が議論に参加するためには、冷静な議論を行うことが重要であると示唆された。第二に、雰囲気が良い場合は関心度が参加意欲を高める一方、雰囲気が悪い場合は、関心度に加えて損失感と手続き的公正感も参加意欲を高め、精神的面倒さは参加意欲を低下させた。冷静な議論が成立している場合は、住民に NIMBY 施設のリスクを適切に説明し、当事者意識を高めることが重要である。一方、荒れた議論となった場合は、きちんと議論の場を収めて適切な会の運営を住民に実感させつつ、施設の建設による損失を適切に住民に伝えることの重要性が示唆された。

引用文献

- 青木俊明 (2016). 地域紛争と公正 大淵憲一(監修) 紛争・暴力・公正の心理学 (pp.174-189) 北大路書房
- Guo, B. & Li, Kunji. (2020). Psychosocial pathways of collective action participation in NIMBY conflict: A regulated double mediation model. *International Journal of Electrical Engineering & Education*.0(0), 1-18.
- Wolsink, M. (2000). Wind power and the NIMBY-myth: institutional capacity and the limited significance of public support. *Renewable Energy* 21 (1), 49-64.
- Wolsink, M. & Devilee, J. (2009). The motives for accepting or rejecting waste infrastructure facilities. Shifting the focus from the planners' perspective to fairness and community commitment. *Journal of Environmental Planning and Management* 52 (2), 217-236.